

安川電機陸上部 びわ湖毎日マラソン (代表選手選考競技会)への道のり

リオデジャネイロオリンピックの代表選手選考競技会として3月6日に開催されたびわ湖毎日マラソンで、当社陸上部の北島寿典選手が2位に入賞し、日本代表に選出されました。この4年間の陸上部の取り組みを紹介します。

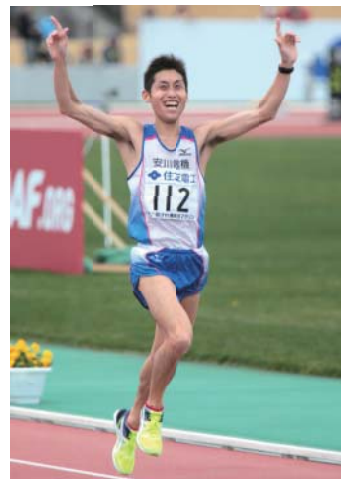


代表決定の連絡を受け本社にて記者会見する
(左から)陸上部長 生山武史、北島寿典選手、陸上部監督 山頭直樹

ロンドンから4年

2012年8月のロンドンオリンピックで中本健太郎選手が6位入賞し、4年の歳月が流れました。

昨年から今年にかけ、世界陸上競技選手権北京大会、福岡国際マラソン、東京マラソン、びわ湖毎日マラソンと代表選考レースが開催され、多くの有力選手が日本代表を目指して凌ぎを削って来ました。



最終選考会となるびわ湖毎日マラソンには、当社陸上部から、主将の黒木文太、ロンドンオリンピックを経験した中本健太郎、マラソン2連勝中の北島寿典の3選手が代表の座を目指して出場。結果、2位(日本人トップ)でゴールした北島選手が代表に選出されました。

びわ湖毎日マラソンで日本人トップでフィニッシュする北島選手

駅伝からマラソンへの系譜

近年は全国各地で市民マラソンが盛んに開催され、一層注目度が増す「マラソン」ですが、当社陸上部発足の起点は「駅伝」でした。

当社陸上部は1974年に北九州市で産声をあげ、全日本実業団対抗駅伝(通称：ニューイヤー駅伝)での「優勝」を目標にチーム強化、選手育成に取り組んできました。

ニューイヤー駅伝では、これまでも数回入賞を果たし、1992年にはチーム最高の3位、2008年には4位という成績を残しているものの、「マラソン」の第一線で活躍する選手の育成には後手に回っていました。そのような中で、チームの駅伝ではレギュラー争いでいつもあと一步のところまで敗れ、辛酸を嘗めていた

中本選手がこれまでの強化の方針を一変し、「マラソン」を主体とした練習に取り組みました。

その成果はすぐに実を結び、2011年 世界陸上競技選手権大会(テグ)でチームとしては初となる男子マラソン日本代表に選出されました。これを機にチームとしても駅伝強化と平行して、本格的にマラソン選手の強化育成にも注力するようになりました。

初マラソンの共通点

現在の陸上部のメンバーは12名です。この中でマラソンを経験した選手は4名。びわ湖毎日マラソンに出場したのが黒木、中本、北島選手の3名です。

この3名に共通していることは、初マラソンが全員、延岡西日本マラソンだということです。中本選手は2008年の大会で激しいデットヒートの結果3位となりました。黒木選手は2011年の大会で7位に、北島選手は2015年の大会で35km地点から独走態勢で優勝しました。

このように、当社で活躍するマラソン選手は、延岡西日本マラソンからスタートしています。

三者三様のマラソンへの取り組み

黒木、中本、北島の3選手は、それぞれに異なったタイプの選手です。びわ湖毎日マラソンへ向けたプロセスも異なりました。

●オールラウンダーの黒木

黒木選手はチームの主将として、マラソン、トラック、ロード、駅伝と最も多くのレースに出場し、チームを牽引してきました。故障が少なく、オールラウンダーとして常に実力通りの走りができる選手です。

2012年2月の東京マラソンで11位と健闘し、その年の12月の福岡国際マラソンで5位。2014年にはPZUワルシャワマラソンで海外の大会も経験し11位。2015年のびわ湖毎日マラソンでも

11位と確実に実績を上げてきました。そして、今回のびわ湖毎日に向けての取り組みとして、2015年11月の甲佐10マイルロードレースでは好タイムで11位に。今年のニューイヤー駅伝の最終7区では区間5位と健闘。最終調整として2月に出場した唐津10マイルロードレースでも優勝争いの中から、5位となりました。今シーズン、マラソンへの準備は万全でした。



●安定感ある中本

中本選手は、自身が得意とするマラソンに取り組み、結果を出してきました。

優勝を目指し出場した2013年の別府大分毎日マラソンでは、川内優輝選手(埼玉県庁)と12kmにわたるデットヒートの末2位。このレース結果で選出された世界陸上モスクワ大会では、5位入賞。2014年の福岡国際マラソンでは、12位。その後、故障もありましたが今年のニューイヤー駅伝では、強風の中、5区で14位。最終調整として出場した2月の全日本実業団ハーフマラソンでは、駅伝・ロードレースを得意とする選手達と最後のトラック勝負まで持ち込み11位と大健闘。ニューイヤー駅伝、ハーフマラソンを通して、びわ湖毎日マラソンに向けて調整を続けてきました。

●遅咲きの男と言われた北島

カミソリのような切れ味鋭いラストスパートで勝負してきた反面、脆さがあったのが北島選手です。走れば「勝ち方」を知っているセンスでトラックレースや駅伝などで結果を出してきました。しかし、勝つために無意識のうちに体に無理を強いてしまい、故障により長期間走れない事もありました。

2013年のびわ湖毎日に出場を試みましたが故障で欠場。2014年には延岡西日本に出場を試みましたが、これも故障で欠場



となりました。

大きな転機となったのが、2014年10月の福岡県選手権10マイルロードレースです。序盤から独走し、2位以下に1分以上の大差で圧勝。ここでロード個人種目での勝ち方を掴みました。

その後マラソンに本格的に取り組み、2015年の延岡西日本マラソンでは初マラソンながら35kmから独走態勢で優勝。9月のシドニーマラソンでも、ケニア勢を制し優勝。遅咲きながらもマラソン2連勝となりました。マラソンに取り組んだことで、故障が減りました。

今年のニューイヤー駅伝では、最長4区(22km)で区間6位。この状態を維持するために、レースなどに出場せず、マイペースな調整方法でびわ湖毎日を迎えました。

代表選考会、びわ湖毎日

この大会を迎える頃には、社内では「誰が代表になってもおかしくない」と期待されるほど3選手の仕上がりの良さが伝わっていました。

大会本番、レース中盤まで当社の3選手が先頭集団で走っているという快挙に従業員は歓喜しました。その後、少しずつ選手が振り落とされていく中でも、29km地点まで中本・北島両選手が日本人のトップ集団で走り続けました。

そして、北島選手が最後の直線で再びカミソリのようなスパートをを見せて2位に浮上し、堂々たるフィニッシュ。中本選手も最後まで粘りぬき8位となりました。

中本選手が2012年びわ湖毎日マラソンでロンドンオリンピック代表に選出されてから4年。そのタスキは、マラソンで大きく成長した北島選手の走りに受け継がれ、安川電機陸上部はこれからも駅伝に、そしてマラソンに挑戦を続けていきます。

【ロンドンオリンピック後からびわ湖毎日までの主要レースの結果】

黒木文太		
2012年12月	福岡国際マラソン	5位
2014年4月	ワルシャワマラソン	11位
2015年3月	びわ湖毎日マラソン	11位
2015年12月	甲佐10マイルロードレース	11位
2016年1月	ニューイヤー駅伝	7区5位
2016年2月	唐津10マイルロードレース	5位
中本健太郎		
2013年2月	別府大分毎日マラソン	2位
2013年8月	世界陸上モスクワ大会	5位
2014年12月	福岡国際マラソン	12位
2016年1月	ニューイヤー駅伝	5区14位
2016年2月	全日本実業団ハーフマラソン	11位
北島寿典		
2014年9月	福岡県選手権10マイル	1位
2015年2月	延岡西日本マラソン	1位
2015年9月	シドニーマラソン	1位
2016年1月	ニューイヤー駅伝	4区6位